

句 動 詞 と 副 詞

伊 藤 清

副詞が (A word added) to the verb ⁽¹⁾ を意味することからも明らかなように、副詞本来の最も重要な機能は word-modifier として動詞（形容詞及び副詞）を修飾することにある。2乃至3個（稀に4個）の助動詞と1個の本動詞とから成る場合の句動詞の間に副詞(句)が置かれる時、その位置は、以下に述べようとする修飾の原則、副詞(句)の性質、その修飾の及ぶ範囲等によって、大体2ヶ所に分れる、1は本動詞の直前であり、他は第1助動詞の直後である。

I. 本 動 詞 の 前

副詞が本動詞の前に来るのは殆んどが A. Bain の言う the ‘rule of proximity’（近接の法則）によるものであり、本動詞を直接修飾する。語修飾副詞 ⁽²⁾（以下 W. M. S.）である。勿論それと関係があり、あるいはそれが修飾するのは句動詞全体であり、本動詞のみではない。句動詞は本動詞を中心としてそれについての時制、態に關聯しての変形にすぎないからである。しかも尚副詞と本動詞との結び付きは最も強い。

(1) 様 態

動詞の様態を示す副詞の例は極めて多く、それらの殆んどすべてが本動詞の直前に来ている。本動詞と密接に結びつき、副詞+動詞の關係が形容詞+名詞の形に書き替えるものの多い ⁽³⁾ ことは副詞と本動詞の密着性の強さを示すも

のであるが、すべてに当てはまるものでもない。

His disordered dress showed that he had been *hastily* aroused from sleep.
—Conan Doyle, *The Dancing Men* (彼の乱れた服は彼が眠りからあわただしく起されたことを示していた。)

He had been *suddenly* jerked from the heart of civilization and flung into the heart of things primordial.—Jack London, *The Call of the Wild* (彼は文明のまっただ中から突然さらわれて、原始世界のまっただ中に投げ込まれたのだった。)

he...appeared earnestly solicitous that his mission should be *speedily* and *courteously* executed.—Washington Irving, *The Spectre Bridegroom* (彼はその使命が速やかにまた丁重になされることを切に望んでいるように思われた。)

次の2例の副詞はその性質から言って W.M.A. であり、意味上から言えば何れも本動詞 *conjured* 及び *resolved* の前に置かれるべき性質のものであり、やや *loose* な書き方とも感じられる。しかし本動詞から離れることによって、基本的には W. M. A. でありながら、後に述べる文修飾副詞⁽⁴⁾ (以下 S. M. A.) の性質に接近するものとも考えられる。

We could see the villages fringing the valley like apparitions which have *suddenly* been conjured from nothing.—Kahlil Gibran, *The Broken Wings* (何もない所から呪文で突然呼び出されて来た幻のように、私達は村々が谷を縁どっ見ているのをすることができた。)

Something must *speedily* be resolved upon.—R. L. S., *Treasure Island*

その他以下の諸例は孰れも事実の認識に関するものであり、従って W. M. A. として本動詞の前に来ているが、*safely* に関しては第1助動詞の次に来るものが多い。

Buck had been *purposely* placed between Dave and Sol-leks so that he

might receive instruction.—London, *The Call of the Wild* (B. は教えが受けられるように D. と S. との間にわざと置かれていた。)

—the hospital had been *slackly* run.—A. J. Cronin, *Shannon's Way* (病院はいい加減に経営されていた。)

I will write to him, and you shall be *publicly* cleared.—Charlotte Brontë, *Jane Eyre* (私は彼に手紙を書き、あなたのことを晴れて潔白にしてあげよう。)

She had been so *simply* taught that there was no nonsense in her head, ...—Louisa May Alcott, *Little Women* (彼女は非常に無邪気に教育されて来たので頭の中には聊かも不純な考えはなかった。)

as if she had been *impatiently* watching the sentence take from his head. —John Updike, *The Poorhouse Fair* (まるで彼女は彼の頭から文章が出てくるのをいらいらしながら見守っていたかのように)

That of Miss Gannett: that Roger Ackroyd had been *secretly* married to Mrs. Ferrars.—Agatha Christie, *The Murder of Roger Ackroyd* (Miss G. の説: 即ち R. A. は Mrs. F. と密かに結婚していたということ。)

it may be *safely* said that he felt the strained relations very keenly.—J. P. Marquand, *The Late George Apley* (彼がその緊張した関係を非常に鋭く感じたと言って差支えない。)

it may *safely* be ascribed, as they both said themselves, to temperamental rather than material difficulties.—*Ibid.* (彼等二人が自ら言っていたように、物質的というよりもむしろ気質的困難に帰してよい。)

(2) 程度、度合

動詞についてその程度、度合を示す副詞は当然のことながら本動詞の直前に来る例のみが見られた。

Until now the animals had been about *equally* divided in their sympathies, ...—George Orwell, *Animal Farm* (今迄動物達は賛否ではほぼ同数に分れていた。)

Issues have always been *evenly* drawn in Boston,...—Marquand, *The Late George Apley* (問題は B. ではいつも五分五分で引き分けとなった。)

Paul Overt met her eyes, which had a cool morning light, that would have *half* broken his heart if he hadn't been so young.—Henry James, *The Liar* (P. O. は彼女と目を合わせたが、その目は涼しい朝の光を帯びており、もし彼が若くなかったならば彼をかなり悲しませたであろう。)

It proved to be the mast of a ship that must have been *completely* wrecked,...—Washington Irving, *The Voyage* (それは完全に難破してしまったに違いない船のマストであることが分った。)

I am sure the annoyance and the terror he lived in must have *greatly* hastened his early and unhappy death.—R. L. S., *Treasure Island* (彼がその中に住んだ苦しみと恐れとがその若くして不幸な死を大いに早めたに違いないと確信する。)

The disposition to hoard had been *utterly* crushed at the very first by the loss of his long-stored gold...—George Eliot, *Silas Marner* (金を貯めたという気持は長年かかってためた金を失ったことで先づ最初に完全に打ちこわされていた。)

As it has been *well* expressed in the paradox of Poe, Wisdom should reckon on the unforeseen.—G. K. Chesterton, *The Innocence of Father Brown* (P. のパラドクスの中にいみじくも表現されたように、叡知は予測しにくいことを考慮に入れなければならない。)

'I should think not! Now, Mr. Pip, it is thought that you must be *better* educated to make you a gentleman.'—Charles Dickens, *Great Expectations*

This thought may be *best* expressed... in a letter which George Apley once wrote to his son John,...—Marquand, *The Late George Apley*

She was sore, but she had not been *badly* hurt, and she looked at her dress to see if it was damaged.—Somerset Maugham, *The Pool* (彼女は皮膚がむけていたが、それ程ひどくはなかった。そして破れているかどうか調べようとしてドレスを見た。)

(3) 時 間

本動詞の直前にあって、その時間的關係を示す副詞は、後述の第1助動詞の次に来る時間の副詞に比べてかなり少いように思われる。以下の *long* その他の副詞(句)はいずれも第1助動詞の後に位置し得るものであるが、その場合でも W. M. A. であることに変わりはない。

Air, musty from having been *long* enclosed, hung in all the rooms, ...—James Joyce, *Dubliners* (長く閉められていた為のかびくさい空気がどの部屋にもたちこめていた。)

He thought he had been too *long* standing at the door and looking out.
—Eliot, *Silas Marner*

while all the rest has been *permanently* blotted out.—W. H. Hudson, *Far Away and Long Ago* (他のものがすべて永久に消し去られているのに)

and but for him to whom your husband gave the ring, I should have now been dead.—Mary and Charles Lamb, *Tales from Shakespeare* (あなたの御主人がリングを与えたあの方がもしいらっしゃらなければ、私はもう死んでいたでしょう。)

the English, who wanted leaders, and had been of *late* much accustomed to usurpation and conquest—Lewis Carroll, *Alice's Adventures in Wonderland* (指導者を求めている、近來侵略や征服に非常になれていたイギリス人)

(4) 場 所

場所を示す副詞 *there*, *here* 等が句動詞の中に使用されることがある。次の第1例で *there* は *overtaken* の次に置くことも可能であるが、既に述べた例と同じく句動詞全体に関わりながら *overtaken* との關係が特に強い。第2例の *here* は *considering* よりもむしろ *not* を除いた動詞全体を修飾する気持の強い W.M.A. である。(*not* は *have here been considering* の否定を通じて文を修飾する。) 従って *can be seen* 全体を修飾しながらも主として *seen* を

修飾する第3例の *here* とは違って、*considering* の次に置けば動詞全体を修飾しようとする意図に反する。尚、時の副詞 *often* は後述するように *can be seen* を修飾する W. M. A. であって、S. M. A. ではない。

A small group of visitors had gathered at the other end of the gallery and had been *there* overtaken by Henry St George,... — Henry James, *The Lesson of the Master* (訪問者達の小さな一団がギャラリーのもう一方の端に集まり、H. にそこで追いつかれた。)

I have *not here* been considering the literary use of language,... — George Orwell, *Politics and the English Language* (私は言語の文学的使用についてここで考えているのではなくて)

Rose trees, which thrive splendidly in the British climate, can *often* be seen *here*. — Wendy Hall, *The Life in England*

II. 第1助動詞の後

本動詞とその直前に来る副詞との関係は少数のやや例外的とも考えられるものを除いて比較的簡単である。動詞は *the word of words* と称される程文章全体の主たる部分、基本的要素であり、これを修飾する副詞は、多少の差はあっても必然的に文章全体を説明するものに近くなる。⁽⁵⁾ しかも動詞を直接修飾する度合が少くなり動詞より離れるに従って文章全体に影響を及ぼす傾向は一層つよまると考えられる。

一般的には第1助動詞の次に置かれた副詞は S. M. A. と考えられているが必ずしもそうではない。⁽⁶⁾ 簡単に言えば、S. M. A. とは文中の特定の要素を修飾せず、文章全体についての補足的説明を指すものであって、主として筆者、話者のその時の判断、感じ方、文章全体についての *comment* を指すものである。問題は副詞の位置よりもむしろ機能である。従って *He will probably come.* の場合、*I think it probable that he will come.* と考えることが可能

であり、*probable* が *that* 以下の文章全体を補足説明していることを考えれば、*probably* は S. M. A. と言いうる。しかしこの場合でも文の中心である動詞を通じての働きであって、動詞と完全に無縁になったのではない。⁽⁷⁾

次に *It has been considered.* という文において、時間の副詞 *always* が本動詞 *considered* の直前に置かれた場合は I. に述べたように、*has been considered* を修飾しながらも特に本動詞との結び付きが強いことを示している。もし *always* が第 1 助動詞の次に置かれると、*always considered* に対応して、この場合の *always* は時を示す *has been* の方を一層強く修飾していると言える。即ち *has been* のあり方についての説明をしている。しかし *considered* が動詞の中心であり、*has been* のみでは余り意味をなさぬことを考えれば、結局は動詞全体を修飾する副詞であると言えることができる。しかし S. M. A. について定義したように、これは文章全体についての筆者、話者の判断もしくは感情を示したものでなく、動詞の時に関する明確な陳述であって、単なる虚字 (Expletive)⁽⁸⁾ でないことを考えれば、S. M. A. とは言い難い。たとえ主語 + 述語について述べていると考えたとしても、結局は時に関する客観的事実を述べたものであって、筆者、話者の感情、判断を示したものではなく、動詞そのものを修飾していると考えることができる。*always* や *often* などが文頭に出ても単なる強意の為に Front-position を占めたものであり、動詞にかかる W. M. A. であることに変りはない。従って、副詞が語、文のいずれを修飾するかは句動詞の場合には位置は重要ではあるが、決定的なものではない。⁽⁹⁾

A. 語 修 飾

(1) 様 態

動詞の様態に関する副詞としては既に述べた *safely* の他に *easily*, *fain*, *willingly* 等が見られたが、下記の例のいずれの副詞もその性質から考えて、

句動詞中に占める位置にかかわらず語を修飾するものと考えられる。句動詞中の副詞の位置に関する原則は第1助動詞の後であり、W. M. A. がいずれの所を占めるかは、原則に従うか、本動詞との密着性の度合に従うかによるものである。*willingly* の場合も *would have put* という動作に直接関係する He 自身の現実の態度であって、筆者もしくは話者の側の感情、判断を表わしているものではない。

“Well, she could *easily* have stepped in,” said the Colonel.—James, *The Liar*

He had not eaten well for a long time, it could be *easily* seen.—Pearl Buck, *Far and Near*

He would *willingly* have put him to death, fearing him as dangerous; Lamb, *Tales from Shakespeare*

When I would have *willingly* displayed my knowledge, they sought to expose my ignorance.—Winston Churchill, *My Early Life* (私が自分の博識を誇示しようとしたであろう時に、彼等は私の無智を暴露しようとする。)

Romeo, having this encouragement, would *fain* have spoken, but he was desirous of hearing more; Lamb, *Tales from Shakespeare* (このような激励があれば R. は悦んで話しただろうが、彼はもっと聞きたがっていた。)

次例の動詞は *had got* であり *shut* は補語あるが、副詞 *somehow* は in some manner の意味の様態を示す副詞であり、語修飾の働きをしている。

Even so, I thought that Rebecca had *somehow* got shut in the cabin when she went down to get a coat.—Daphne du Maurier, *Rebecca* (たとえそうでも R. がコートを取りに船室へ下りて行った時に何かのはずみで閉じこめられたのだと私は思った。)

(2) 程度、度合

第1例の *rather* は *would have been apprenticed* を修飾し、第2例では *rather* は *amazed (shocked とは無関係)* を修飾する W. M. A. である。(第1例は見方によっては S. M. A. と考えられないこともない。) *even* は強調を示すが *still, also* と共々 W. M. A. である。

I would far *rather* have been apprenticed as a brick-layer's mate,...—Churchill, *My Early Life* (煉瓦職人の徒弟になった方がどれだけよかったかも知れない。)

Phillis had been *rather* amazed than shocked at his proposition.—Thomas Hardy, *The Melancholy Hussar of the German Legion* (P. は彼の案にショックを受けるよりもむしろ驚きあきれた。)

He hadn't *even* been thinking about shooting him until the storekeeper suggested the idea.—John Steinbeck, *The Pastures of Heaven* (彼はジミーを射つことについて店の主人がその考えを仄めかすまでは考えたことさえなかった。)

It may *also*, more rarely, be used for pathetic effect,...Marjorie Boulton, *The Anatomy of Prose* (それはまた一層稀ではあるが悲壮感の為に使われることもある。)

(3) 時 間

時間に関する副詞は第1助動詞の後に来るものが殆んどである。第1 + 第2助動詞の形は多くが時を示すものであるからとも考えられるが、いずれにしても句動詞中の副詞の原則的な地位を占めるものである。 *Always* について述べたように、時の副詞は動詞についての時の関係を示す陳述であり、動詞との結び付きは強く、語修飾の働きを為すものである。

When を示す時の副詞(句)には、

If so, they would perhaps have noted that the white hoof and horn with which it had *previously* marked had *now* been removed.—Orwell, *Animal Farm* (もしそうでしたら、以前にその旗についていた白い蹄と角の模様はすでに取

り除かれているのを多分気づいていたと思います。)

この *now* に対して p. 5 で例に上げた *I should have now been dead* の *now* は *have been (dead)* を説明するものであり、特に本動詞 *been* を強く意識しており、語修飾の傾向が顕著であると言える。また同じ頁のその次の例に示した *of late* も同様な性質のものであるが *had* の次に置くことも可能である。

次の例で *ever* は *could have happened* を強める W. M. A. である。 *before* 及び *since* は *happened* を修飾する。

There had followed then a time of such happiness that Chips, remembering it long afterwards, hardly believed it could *ever* have happened *before* or *since* in the world.—James Hilton, *Good-bye, Mr. Chips*

just も第 1 助動詞の次に置かれた時には句動詞全体を修飾し、本動詞の前に置かれた時には特にそれを修飾する気持が強い。

Three more officers had *just* been put in with us.—Ernest Hemingway, *A Farewell to Arms* (もう三人の将校が我々の仲間に丁度押し込められてきた。)

We were both war heroes, and both of us had *just* been elected to Congress.—Norman Mailer, *An American Dream*

I've been *just* thinking you so long that it hardly seems as though you are a tangible flesh-and-blood person.—Jean Webster, *Daddy-Long-Legs* (ずっとあなたのことを丁度考えていたのであなたが触れることのできる血の通った人間だとは思えない位です。)

Minnie's flat, as the one-floor resident apartments were *then* being called, was in a part of West Van Buren Street...—Theodore Dreiser, *Sister Carrie* (one-floor を使ったアパートがその当時フラットと呼ばれていたように、M. のフラットは W. S. の一部にあった。)

It had *formerly* been mixed up with other motives;...—Willia Cather, *The Professor's House* (それはもとは別の動機がまざっていたものであった。)

...much of Spain must *at one time* have been under Moorish rule,...
Ernest Weekley, *The English Language*

She must *first* have struck the pavement,...—Mailer, *An American Dream* (彼女は最初墜落して舗装道路に当たったものにちがいない。)

when the aunt, who had *at first* been struck speechless, wrung her hands, and shrieked out,...—Irving, *The Spectre Bridegroom* (その時最初は驚いてもとも言えなかった叔母は両手をしばって叫んだ。)

Duration を示す時の副詞(句)として *hitherto, thus far, long since, so far* などが見られたが、いずれも単なる時の事実関係を示し、第1助動詞の後に来るという原則に従ったものである。*hitherto* は本動詞 *scattered* の前に置くこともできるし、*long since* も *thus far* も2語に分割するのでなければ本動詞の後に置いてそれを強めることができる。尚 *long* は *since* を、*thus* は *far* 修飾する。

Brayne's crazy millions had *hitherto* been scattered among so many sects ...—Chesterton, *The Innocence of Father Brown* (B. の巨額の富は今迄非常に多くの団体に振り分けてばらまかれて来たので)

but the majority of the doors belonged to business places that had *long since* been closed...—O. Henry (しかし大抵のところはオフィスでその入口はとうの昔に閉っていた)

as miserable as the life he had *thus far* been leading,...—Theodore Dreiser, *An American Tragedy* (今迄の暮しもみじめだったが)

Frequency を示す時の副詞(句)には *once, once more, twice* など definite な frequency を示すものと、*often, always* など indefinite なそれを示すものがある。

If he could *once* have made Marie thoroughly unhappy,...—Willa Cather, *O Pioneers!* (もし彼が M. を一度徹底的に不幸にさせてしまうことができていたら)

His cowardice had *once more* been made plain to the house.—Thomas Hughes, *Tom Brown's School Days* (彼の卑怯さが再び寮内に知れ渡った。)

It has *often* been noted that two, and two only, of our senses are the channels of art and give us artistic material.—Jane Ellen, *Ancient Art and Ritual* (我々の感覚のうち2つ、そして2つだけが芸術の仲介であり、我々に芸術的素材を与えてくれるということが屢々言及されてきた。)

I have *always* been considered so—so very respectable.—Christie, *The Murder of Roger Ackroyd* (私はいつも本当に一本当にちゃんとした女だと思われてきました。)

B. 文 修 飾

(1) 確言の副詞

Adverb of Assertion⁽⁴⁰⁾ と言われるものは例を見た限りでは第1助動詞の後に来るものが殆んどすべてである。同じ第1助動詞の後であっても W. M. A. が原則に従った場合とやや異なり、S. M. A. の場合は本動詞の修飾になることを避けてこの位置を占めたものであり、文頭、主語と述語との間、文尾等にある場合に比して、句動詞中にある限り動詞との関係は最も強いと見做しうる。以下の最後の例では *really* は強意に使われ *worshipping* を修飾する気持が強く S. M. A. よりもむしろ W. M. A. と考えられる。

She had *evidently* been waiting for his return.—Somerset Maugham, *The Pool*

No exposition that excludes these countries can *possibly* be called “international.”—James Kirkup, *The Year of Japan* (このような国々を除外した博覧会は到底「国際的」とは呼べない。)

News of all this had *apparently* been brought west in some way by people who knew Asa and his father and brother. — Dreiser, *An American Tragedy*

It should *really* have been called the “Taiwan Pavilion” or the “Formosa Pavilion.” — Kirkup, *The Year of Japan*

he was beginning to feel that he had been *really* worshipping—Hughes, *Tom Brown’s School Day*

次例の *indeed* は第 2 助動詞の次に位置するが、約 200 の例中ここに来ているものはこれのみであり、例の極めて少ない位置のように思われる。普通 *must* の次に置かれるべき性質の S. M. A. である。

“You must have *indeed* been sent from the good God to replace my friend Hastings,” he said, with a twinkle. — Christie, *The Murder of Roger Ackroyd* (「あなたは全く私の友人 H. の代りに 神様がよこして下さった方に違いありません。」と彼は目をきらっと光らせて言った。)

以上述べたものが文章全体についての筆者、話者の判断、感情を示し補足的説明をなしているのに対して、否定語は文の中心(動詞)を打消すことを通じて全文に影響を及ぼすものである。前者に比べて後者は動詞との関わりが一層深い。*not*, *never* 以外に *hardly*, *scarcely*, *seldom*, *rarely* 等も度合よりもむしろ否定の気持が強いと思われる。大抵の場合第 1 助動詞の後に来て動詞の否定を通じて文の陳述全体を否定する。

‘She hasn’t been touched, really,’ said the girl. — James, *The Lesson of the Master* (「彼女は心を動かされたのではなかったのです、本当に。」)

Casey Jones’ fame rests on a series of nondescript verses, which can *hardly* be called poetry. — Benjamin Albert Botkin, *American Folk Tales* (C. J. の名声は一連の漠然とした韻文に基くもので、それらは殆んど詩と言えるものではない。)

That has *scarcely* been done since the war. — John Le Carré, *The Looking-Glass War*

否定語と他の副詞が相接して使用される時の語順は普通否定語が先行する。
後に来る副詞(句)は W. M. A. が多いように思われる。

But it broke inwards and the broken pieces got jammed across, and couldn't *easily* be removed from outside. — Hughes, *Tom Brown's School Days* (しかし、内側に破れたので、破片がからんで穴をふさいでしまったから、外側からは簡単に取りはずせなかった。)

The windmill, however, has *not after all* been used for generating electrical power. — Orwell, *Animal Farm* (しかしこの風車は結局は発電には使用されなかった。)

I had *never before* been so overcome with a sense of my utter importance. — Françoise Sagan, *Bonjour Tristess* (私は今迄これ程徹底的な無力感にうちひしがれたことはなかった。)

上例2箇の *not* 及び *never* は孰れも *could be removed* を修飾する *easily* を含めたもの、*had been used* を修飾する *after all* を含めたもの、及び *had been so overcome* を修飾する *before* を含めたものを否定することによって更に全文を否定する。*easily, after all, before* はすべて今迄述べた通り W. M. A. である。

逆に否定語が他の副詞の後に置かれた場合には、同じく第1助動詞の後に相接して位置しながら語修飾の性格が強まる。例えば次の引用文で *not* はより強い *probably* の後に来ることによって、*probably* の方が *It is probable that it would not have taken...* と S. M. A. の働きをするのに対し、*not* は *would have taken* を修飾する W. M. A. に近くなる為である。即ち *He isn't ill.* ではなく、*He is not ill.* のように感じる為であろう。*not* が S. M. A.

とされていていながらも常に文否定と語否定の間を動揺している証左と言うことができる。第2例の *never* もまた同様に W. M. A. に近くなる。尚 *so far* も *still* も W. M. A. と考えられる。

But if it had not been this sort of school it would *probably not* have taken Chips.—Hilton, *Good-bye, Mr. Chips* (もしそれがこんな種類の学校でなかったら、恐らく C. を採用しなかっただろう。)

It has *so far never* been called into play.—Christie. *The Murder of Roger Ackroyd* (それは今迄のところ表立った活動を示すことはなかった。)

in the midst of the green countryside, which have *still not* been swallowed up by a great and greedy town.—Hall, *The Life in England* (巨大で貪欲な都市によって未だ汚されていない緑の田園地帯のまん中で)

従って I. に述べた性質の副詞が否定、その他の文修飾、あるいは主として第1助動詞の後に来るその他の副詞と共に使用された時には次のように分れた形が見られる。

Miss Dove had *not* been *greatly* astonished by the turn of events.—F. G. Patton, *Good Morning, Miss Dove* (Miss D. はかわるがわる起る出来事に大しておどろきはしなかった。)

When the war broke out he had *not* been *long* qualified...—Somerset Maugham, *Here and There* (戦争が起った時には医師免状をもらって間がなかった。)

The economic revolution of the Roman Republic had *never* been *clearly* seen by the common people at Rome.—G. H. Wells, *A Short History of Mankind* (ローマ共和国の経済革命はローマの庶民によってははっきりと認識されてはいなかった。)

he will reflect that German, i. e. High German, has *always* been *completely* shut off from us,...—Ernest Weekley, *The English Language* (ドイツ語即ち高地ドイツ語は常にイギリス人から完全に遮断されてきたことを考えるであ

ろう。)

It had *evidently* been *newly* tuned and put in apple-pie order. — Louisa May Alcott, *Little Women* (それは明らかに新たに調律されていて調子が整っていた。)

(2) 接続副詞

機能上は W. M. A. や S. M. A. と並ぶものであり、その接続詞としての性質の故に本動詞の直前にあって直接それを修飾したり、あるいは他の特定の語句を修飾したりすることはない。⁽⁴⁾しかしその機能の一はなお文を修飾することであり、次例の *therefore* は for that reason という意味で、確言の副詞には見られない接続詞の働きをなしながら、その関係する文章全体を修飾している。動詞との関係は確言の副詞に比して一層うすく、次例では *really* を含めた全文を修飾する。

The curse of the Golden Touch had, *therefore*, *really* been removed from him. — Nathaniel Hawthorne, *A Wonder Book for Boys and Girls* (黄金化の呪はそれ故本当に彼から取り除かれてしまっていた。)

He actually sports a pair of gold earrings which would *otherwise* have been hidden carefully under the wine-press with his little equipment of silver plate. — Bernard Shaw, *The Man of Destiny* (さもなければ銀の皿の小さな附属物の付いた葡萄しぼり器の下に注意深く隠されていたであろう一對の金のイヤリングを彼は実際に見せびらかす。)

文章構成上の3要点として Raymond Chapman は accuracy, ease, grace (*A Short Way to Better English*) を上げ、J. C. Nesfield は perspicuity, energy, euphony (*Senior Course of English Composition*) を、Somerset Maugham は lucidity, simplicity, euphony (*The Summing Up*) を、また F. L. Lucas は clarity, brevity and variety, urbanity and simplicity

(Style) を上げている。各人に共通して最初に上げられているのは孰れも文意の明確さである。The ‘rule of proximity’ はこの明確さを達成する為の、的確な単語の選択の次に配慮されるべき重要な法則である。H. W. Fowler が *Modern English Usage* の Position of Adverb の項で、Eric Partridge が *Usage and Abusage* の Order of Words の項で副詞の位置を論じているのも結局はこの法則の問題に帰着する。3乃至4個よりなる句動詞の2箇所に分れて副詞が配置されるのも根本的にはこの法則に従おうとする意志に基いて自ら定まっている語順の法則を守ったものに他ならない。一般的傾向としては句動詞全体を修飾しながらもその中心である本動詞に重点を置いて修飾する時には本動詞との密着性の強弱、その他の理由で主としてその直前に（時の副詞は第1助動詞の次が多い）、また文章全体を修飾する時には本動詞との結び付きを避けて殆んどすべて第1助動詞の後に置く。

Happily he did not die. の *Happily* は文頭に出て筆者、読者の判断、感情を表し全文を修飾する度合の最も強い S. M. A. であり、*He runs fast.* の *fast* は動詞を修飾する度合の最も強い W. M. A. である。その中間にある場合、例えば *It has always been completely shut off.* の *completely* は句動詞全体を修飾しつつ *shut* と強く結び付くが、*always* は *has been* を中心としながらも *completely* を含めた句動詞全体の時の関係を示す。また本動詞と離れることによって句動詞全体の修飾を中心としながらも多少とも文修飾の傾向を帯びる。*It has evidently been newly tuned.* の *evidently* は筆者、話者の判断を示し、動詞についての時に関する陳述である *always* に比べて、動詞との関係は一層うすくなり、自ら文修飾の働きが生ずる。もしこの自然な語順から逸脱した例が見られるならば、それは結局 Partridge の言葉⁽⁹⁾ にもあるように意味を更に一層明確に伝えようとする為である。文中に於けるごくわずかな位置の相違にも言語本能の現れを見ることができる。

- 註(1) Eric Partridge, *English* (Macdonald, 1954), p. 56.
- (2) Henry Sweet, *New English Grammar* (Oxford, 1952), § 358 ff.
- (3) H. W. Fowler, *Modern English Usage* (Oxford, 1965), p. 448.
Partridge, *Usage and Abusage* (Hamish Hamilton, 1948), p. 218.
- (4) Sweet, *N. E. G.*, § 364 ff.
- (5) このことは stress の面からとも言いうる。
George O. Curme, *English Grammar* (Barnes & Noble, 1952), § 70, B.
- (6) 下記の文法書では criteria for adjuncts (8.3) として、また criteria for disjuncts and conjuncts (8.4) として夫々 3 箇条ずつ揚げ明確な診断法を示している。尚 adjunct は W. M. A. に、disjunct は S. M. A. に、conjunct は Conjunctive Adv. に相当する。
Randolph Quirk, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, Jan Svartvik, *A Grammar of Contemporary English* (Longman, 1972).
- (7) Some Grammarians say that an Adv. may be used to qualify a Sentence as a whole *and not* any particular word or word-group within the Sentence. As has been pointed out in §§ 294—6, it is perfectly true that the insertion of an Adv. (or an Adv. Equiv.) in a Sentence *does* modify or qualify the whole Sentence, *but it does so only* by qualifying some word or word-group in the Sentence. — H. R. Stokoe, *The Understanding of Syntax* (Heinemann, 1937), § 326.
- 文修飾副詞および形容副詞と態様副詞 (Adverbs of Manner) と異なる重要な点は、前二者は少くとも動詞の意味のみを専ら修飾するとはいわれないが、後者は明らかに動詞を修飾するものであるということである。— August Western, 「英文配語の研究」(篠崎, 1953). § 30, 斎藤静訳註。点線は筆者。
- (8) Western, 「英文配語の研究」, § 17。
A Grammar of Contemporary English では disjuncts は alternative な疑問及び否定によって他の副詞と対比され得ないとする (8.4)。虚字も同様である。
- (9) Western, 「英文配語の研究」, § 53。
Curme, *Syntax* (D. C. Heath & Co., 1931), p. 133 では次の例が見られる。
- ‘He must *surely* have seen him,’ or
‘He must have *surely* seen him,’ or
‘He *surely* must have seen him.’
- (10) Sweet, *N. E. G.*, § 350.
- (11) *each, both, all, etc.* *each* は副詞として認められており、副詞と同様第 1 助動詞

の後に置かれる。*both, all* 等の代名詞も *each* と同様の働きを示す場合があり、これらは主語と同格と言われているが副詞的気持が強く、従って副詞の占める位置にも来る。ただその性質上接続副詞と同じように直接動詞にかかる意味合が少い為、第1助動詞の後の文修飾の位置に来るものである。また以下の最後の例では動詞は2箇であるが、その間にある *myself* も多少とも副詞的に働いていると感じられる。

We had *each* been drinking out of one of the bottles and I took my bottle with me... — Hemingway, *A Farewell to Arms* (私達はそれぞれ一本ずつ壺をかかえて飲んでいた。私は自分の壺をもって。)

They had *both* been dreaming the same dream. — Lamb, *Tales from Shakespeare*

It had *all* been got ready specially. — Maurier, *Rebecca* (その部屋は全く特別に用意されております。)

Mrs. Tablet: I could never bring myself to teach my children what I couldn't *myself* believe. — Somerset Maugham, *The Sacred Flame*.

- (12) But adverbs may depart from the positions recommended in the foregoing paragraphs—if there is good reason. The best reason of all is clarity: (*Usage and Abusage*, pp. 219–20).